

年中行事

空間を飾り、
物遊ぶ意匠合戦は
命も奪らしを芸術力で
埋め尽くしている

日本 デザイン

暮らしのなかの

三月

雛人形が大量に広く定着した江戸時代には、大層で豪華な享保雛、丸船で優雅な次郎左衛門雛、江戸生まれの精巧な吉吉雛など、質の高い雛人形が次々に誕生した。人形の配置は現在、「七段十五人飾り」が主流。しかし日本の狭い住宅事情から、限られた空間を巧妙に利用した飾りつけの模範も多い。五段・三段・真王飾り(平飾り)のほか、「ケース型」や「折り畳み収納型」などもある。



五月

古来、菖蒲を刺に飾る風習から生まれた端午の節句は、武家社会への愛護に言い、菖蒲と「尚武」をかけて武家男子の立身出世を願う慣習に変化する。江戸時代には飾り愛でる町人達が、同じ出世の象徴である鯉をモチーフに「鯉のぼり」を生み出した。最上部に取り付けられる矢車と吹流しは魔除けの意味があり、吹流しには家紋を入れる家も多い。



一月

怒りごとを楽しむ町屋社会の一年にあつて、正月はひとときわ華やか楽しい期間だ。富や福をかき集める飾り熊手、歳神の伏代になる門松、江戸の世で流行りはじめた風囃子……。江戸時代には豪華な風が大流行し、幕府がたびたび「風囃子禁止令」までつくった。羽子板、注連飾り、鏡餅、破魔矢といった風物詩連も飾りを愛でる町屋文化に育まれたものが多い。



写真協力:人形師 原孝洲 03-5699-4031

食生活も年中行事も、美しく装われたビジュアルがあつて愛される。これは江戸時代から変わらない日本人の感覚だ。この美意識とその産物は、今の私達の生活にもつと当たり前のように存在している。

二百年後に飛び出した論争は
光琳の意図のうち

もう一つ私の推測を述べますと、当

時の絵師や職人達は、自分達の作品が百年、二百年、三百年と後々まで残っていくことを想定して作品を作っていたのではないかと思ひます。やがていつか時代が変わつて、この絵はどのような解りかたで読まれるのだろうか、彼らは考えました。絶対に見破られない手法を用いましたので、全筋だ、いや全筋ではないと、今頃論争になつてゐるのは恐らく光琳の多想内であつたに違ひない、私は思ひます。